

篠原房枝作 「外泊」

柴田洋子 ひろみ、今日もうちに来る？
田辺ひろみ うん。お願い、今晚も泊めてよ。
ナレーション 田辺ひろみは、クラスメートの柴田洋子の家に外泊することに決めました。今月に入ってもう3度目です。そして洋子の家から――。

効果音 (電話の呼び鈴)
ひろみ もしもし、あ、お母さん？ あのさ、今日も洋子の家に泊まるから。(間)え？ 違うの。ちょっと宿題が多すぎて、2人で徹夜して勉強するわけ。(間)そう本当。おばさん？ 今は留守だって。(間)はいはい、分かりました。それじゃ。

効果音 (受話器を置く音)
洋子 あ～あ。本当に勉強なんかする気？
ひろみ ええ、勉強と言いましても、いろいろとありまして。その、食べる勉強、踊りの勉強、音楽の勉強そしてレコード鑑賞などもあります、はい。(二人で大笑い)
洋子 だけど、ひろみ、役者ね。自分の親まで平気でだませるんだから。ま、うちは構わないけど、本当に大丈夫なの？
ひろみ ん？ うん。平気平気、うちは。
ナレーション そんなわけで、彼女は洋子の家に泊まりました。勉強をしたかって？ もちろんそんなことはせず、夜遅くまで二人で遊んで、おしゃべりをして、好き勝手なことをしていました。翌日、学校で――。

効果音 (教室のガヤ)
浩一 よオ 田辺、お前、また寝不足かよ。さっきの授業、先生がにらんでたぜ。
ひろみ あ、そう。別に気にしないの、わたし。他人になんと言われようと、眠いんだから。ゆうべも遅くまで話し込んでいたの。あ～あ眠い。ほっといて。
浩一 なんだ。分かったよ。
裕二 おい、浩一。またあいつ、外泊か？
浩一 そうらしい。ゆうべも遅くまで話し込んでいたらしいよ。全くどういうんだらうな。でもよ、おれ、気になるんだよな、あいつのこと。
裕二 なんだ、浩一、好きなのか？
浩一 バカ言え。そんなんじゃないよ。ただ、あまりにも変わりすぎたからさ。去年まではもっと素直で快活で…。第一、あいつは目立つ存在じゃなかったんだよな。
茂 そう言えば、浩一は1、2年も同級か。
裕二 おれも1年の時は、浩一と同じクラスだったけど、田辺なんてやつがいたの知らなかったぜ、ほんと。
浩一 裕二も無責任なやつだなあ。同級の女子の顔ぐらい覚えておけよ。もっとも、お前には山内直美の顔しか映ってなかったからな。
裕二 よせよ、そんな昔の話。
浩一 あれ？ 昔の話ですかねえ。
裕二 こいつ！

茂 だけど、なあ浩一、少なからずも以前の田辺を知っているんだからな。今の状態をほっとくのは、お前らしいぞ。

浩一 あ、ああ。分かっているよ。

ナレーション 浩一と裕二は、お互いに親友を自認する仲でした。特に浩一は、他人の困っていることや問題を黙って見ておれないたちだったのです。

その日の放課後――。

生徒 起立、礼。(口々に別れのあいさつ)

浩一 おい、田辺。

ひろみ え？ あ、浩一君。何か用？

浩一 あのな、ちょっと話したいことがあるんだ。

ひろみ なあに？

浩一 あのさあ、あの…。

ひろみ 早く言って。用がないなら帰るわよ。さよなら。

浩一 ちょっと待てよ、田辺。

ひろみ 何よ！

浩一 君、変わったな。以前はもっと素直だったぜ。最近よく外泊してるらしいけど、何かあったんじゃないのか？

ひろみ 浩一君に関係ないでしょ。わたしはわたし。あなたにそんなこと言われる筋合いはないわ。

浩一 関係なくないよ。クラスメートとして、最近の君の様子、ほっとくわけにはいかないんだ。裕二だって、君のこと、心配しているんだ。な、おれでよかったら、なんでも相談乗るから話してみろよ。今の君は、君らしくないからな。何か原因があるんだろ？

ひろみ 知らないわ、わたし。帰るわよ。

浩一 あ、田辺…。

ナレーション 浩一の説得もむなしく、ひろみは背を向けて帰ってしまいました。そして、その日も彼女は家には帰らず、洋子の家に泊まりました。

洋子 どうしたの、ひろみ？ ずいぶん沈んでるじゃない。やっぱり家が恋しいんでしょ。

ひろみ まさか。あんな家。ううん、洋子という方が勉強もできるし、楽しいし…。

洋子 まあね。わたし、一人っ子だから、ひとみがいてくれた方が、^{きょうだい}姉妹ができたみたいだし。大体うちの両親は毎晩遅いし、朝だってわたしが家を出るところでも、まだ起きないで、みんなお手伝いさん任せ。顔を合わすのなんて週に2、3度。ひろみが来てくれなかったら、わたしは退屈だし、この大きい家に独りでのなんて気が狂っちゃうわよ。ひろみもいろいろ事情があるのだろうけど、わたしたちも似た者同士なのよね。

ひろみ そ、そうね。親なんて勝手よね。こうして毎晩のように洋子の家に泊まっているのに、何も言わないし。第一、何も言えないのよ。わたしたちはわたしたちで自由気ままに…。

ナレーション 二人は、この世も遅くまで、レコードを聴いたり、踊ったり、好き勝手なことばかりして過ごしました。翌朝――。

先生 ……ということだ。それでは終わりにする。あ、田辺、用があるから放課後、職員室に来なさい。分かったね。

裕二 (小声で)おい、ほらお呼びが来たぞ。

茂 あったりまえだ。あんなにハデに行動していて、学校側が黙っているはずないよな。きっと

家から電話でもあったんじゃないか？

裕二 なあ、浩一。昨日、田辺に何も話さなかったのか？

浩一 そうなんだ。帰られたよ。

茂 情けないなあ。

浩一 ああ。でも彼女、何も理由がないのとは違うぜ。どうも引っかかるんだ。

裕二 よし、今日はおれも付き合うよ。

音楽 (ブリッジ)

茂 お、田辺が戻ってきたぞ。あ、おい、あいつ泣いてるぜ。おれ、女の涙は弱いんだ。

裕二 浩一、なんとかしてくれ。

浩一 全く、「付き合う」って言ったの、お前たちだろ。しょうがないな。(間)

浩一 あの…、田辺。

ひろみ (泣きながら)え？ あ、またあなた。「ほっといて」って言ったでしょ。

浩一 まあ聞けよ。先生に何を言われたんだい？ 外泊のことだろ？

ひろみ いい加減にしてよ。あなたに話したからって何がよくなるの？(ワツと泣きだす)

浩一 田辺、落ち着けよ。さ、ここに掛けて。確かに何も知らないおれがズケズケ言ったこと、悪かった。謝るよ。ごめん。だけど、イヤなことは自分のうちに押しとどめておくより、放してしまった方が楽になるぞ。な、話してしまえよ。

ひろみ (しゃくり上げながら)浩一君、本当に聞いてもらえる？

ナレーション 浩一はうなずきました。そして、ひろみは静かに話し出しました。自分の家の家庭不和、両親の仲たがひ。たった一人の大学生の兄も、見るに見かねて家を出ていってしまったこと。たとえ家に帰ったとしても、そこに待っているのは、愛情のない冷たい空気とやつれた母親だけ。そんな家族を見ているのがイヤで、家族との触れ合いのない、同じ境遇の洋子の家に、ずっと外泊していることをみんな彼女は打ち明けました。

浩一 そうだったのか。そりゃつらいな。それで、このこと先生に言った？

ひろみ ううん。ただなんの訳も聞かず、「友人の家に外泊するのが癖になったようなやつは、不良の始まりだから、嚴重に反省しろ」ってどなられたの。

浩一 ひどいなあ。大人なんて、ちょっと道徳に離れたような行動をすると、おれたちばかり一方的に責めて、本来の、一番の原因は大人たちなんだということは、全然分かっていないんだからな。しかしな、田辺、いかなる場合も逃げたらダメだ。そりゃおれだって、時々外泊する。おやじにこっぴどくやられた時なんか、1週間も裕二の家に泊まり込んだこともある。だけど、少しはせいせいするかと思ったけど、ちっともそうじゃなかった。はっきり言って、むなしかったな。1週間たって、家に帰った時、おやじが言った。「浩一、逃げるな。お前が仮に自分を正しいと信じていても、外泊することは、その正しさの証明にはならんぞ」って。こたえたな。

ひろみ ふーん。痛いこと言うのね、浩一君のお父さんって。

浩一 うん。だけど、あとでおふくろに聞いたら、1週間、おやじとおふくろと二人で、おれのために祈っていたんだって。二人ともクリスチャンなんだ。君の両親だって、君のこと全然かまってくれないように思えるかもしれないけど、心の中では、やっぱり心配してると思うんだ。というよか、ほんとはものすごく寂しいんじゃないかな。

ひろみ 寂しい？

浩一 うん。君だけじゃなくて、君のお父さんも、お母さんも、本当はお互いに求め合っているのに、

愛し合っているのに、それがうまく言葉や行動で表せないんじゃないかなあ。うまく言えないけど。

ひろみ

そうかしら。浩一君はそう思う？ほんとに親の愛って信じられる？

浩一

うん。おれは「逃げるな」と言った時の、おやじの涙を見た時、少なくともそれだけは信じられた。だからさ、外泊の楽しさに紛れて、逃げちゃいけないよ。もう一度、つかむんだ、君の一番大切なものを――。

<完>